

# 支援を組み立てるための基本

- ・ 強度行動障害の支援に必要な知識

使用する資料

差込資料②「行動チェックシート」

差込資料③「特性確認シート」

※お手元にご準備ください

# 本題に入る前に・・・

- 強行研修のストーリー & 到達点
- この時間で学ぶこと
- この時間の流れ①②

# 強行研修のストーリー & 到達点

ストーリー	基礎研修	実践研修
①	強度行動障害について基本的なことを知る	支援を組み立てるための基本的な流れの確認
②	アセスメントに基づいた（情報を収集し、解決すべき課題を整理した上での）個別支援の大切さを理解する	アセスメントの具体的な方法を学ぶ
③	支援の具体的な方法を知る	支援手順書の作成方法を学ぶ
④	チームプレイの重要性を理解する	記録の方法と支援手順書の修正方法を学ぶ
⑤	適切な支援を続けていくための知識を得る	組織として取り組むことの重要性を学ぶ
到達点	計画された支援の根拠を理解し、決められた手順通りに支援をすることができる。	チームの動きをイメージし、支援の手順を考え文章化する。また、支援結果に合わせ、支援及び手順の修正をすることができる。

# この時間で学ぶこと

- 基礎研修で学んだことを振り返ります。
- 支援を組み立てるための基本的な流れを把握します。
- 実践研修の進み方と演習の構成を確認します。

# この時間の流れ①

講義

 動画視聴

## ①強度行動障害の理解

- ・ 支援の基本的考え方
- ・ 強度行動障害の状態
- ・ 行動障害が起きる理由

## ②強度行動障害の理解

- ・ 障害特性の理解

## ③支援のアイデア

- ・ 障害特性に基づいた支援

# この時間の流れ②



講義

## ④基本的な情報収集

- ・行動を見る視点

## ⑤特性の分析

- ・特性の把握と適切な対応

## ⑥チームプレイの基本

- ・チームプレイの必要性

## ⑦支援を組み立てるための基本

## ⑧実践研修の進み方と演習の構成

# ①強度行動障害の理解

- ・ 支援の基本的考え方

# 支援とは

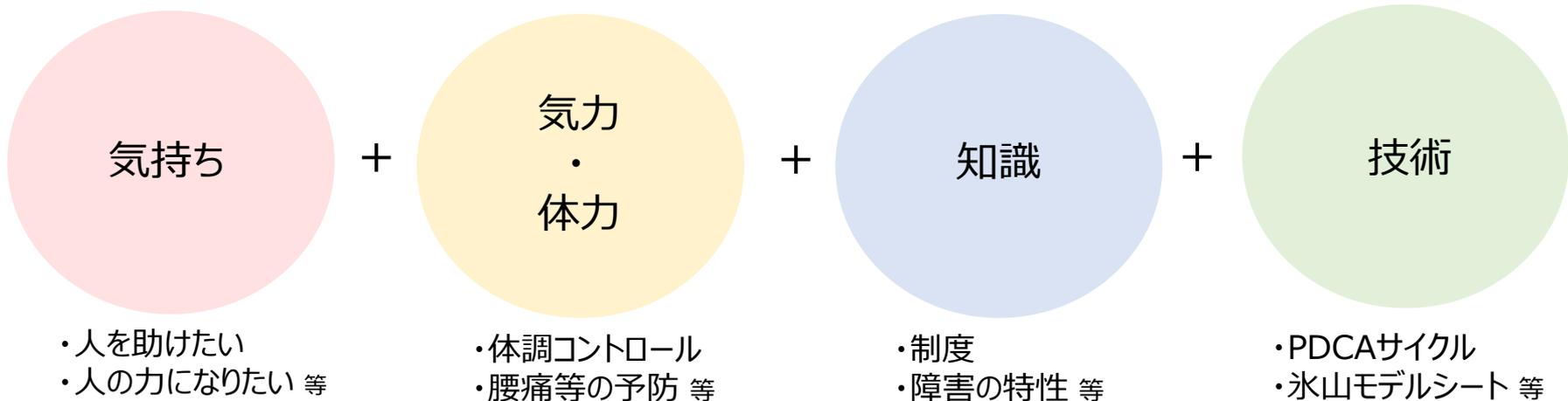
他人を支えたすけること

労力や金銭などの面で、その活動や事業を助ける意を表す



出典：三省堂大辞林第三版

支援の専門家が、支援を提供する際に必要なもの



# 基礎的な支援の流れ



# よりよい支援の流れをつくるためのポイント



2 情報整理時、**ICF**を活用する



2 情報分析時、**冰山モデルシート**を活用する



チームで支援の手順を統一するために、**支援手順書を作成・共有**する



11項目におよぶ支援の流れは、大きく下記の4つに分けることができる。

- 1～6 = 計画 (Plan)
- 7・8 = 実践 (Do)
- 9・10 = 評価 (Check)
- 11 = 改善 (Action)

⇒これを「**PDCAサイクル**」といいます

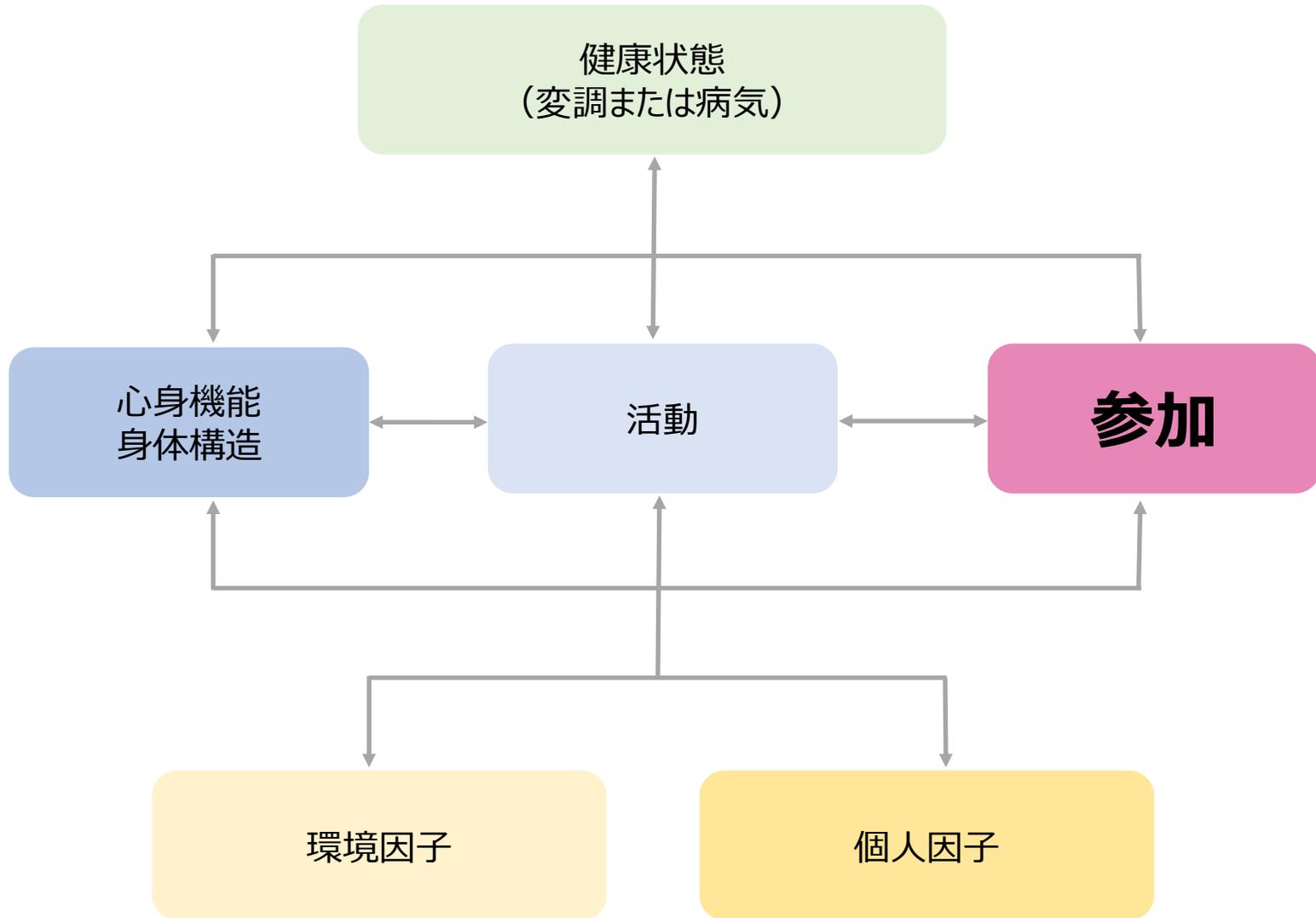
業務を継続的に改善していく手法。品質管理の国際基準であるISO9001や、ISO14001などにも考え方が採用されている。



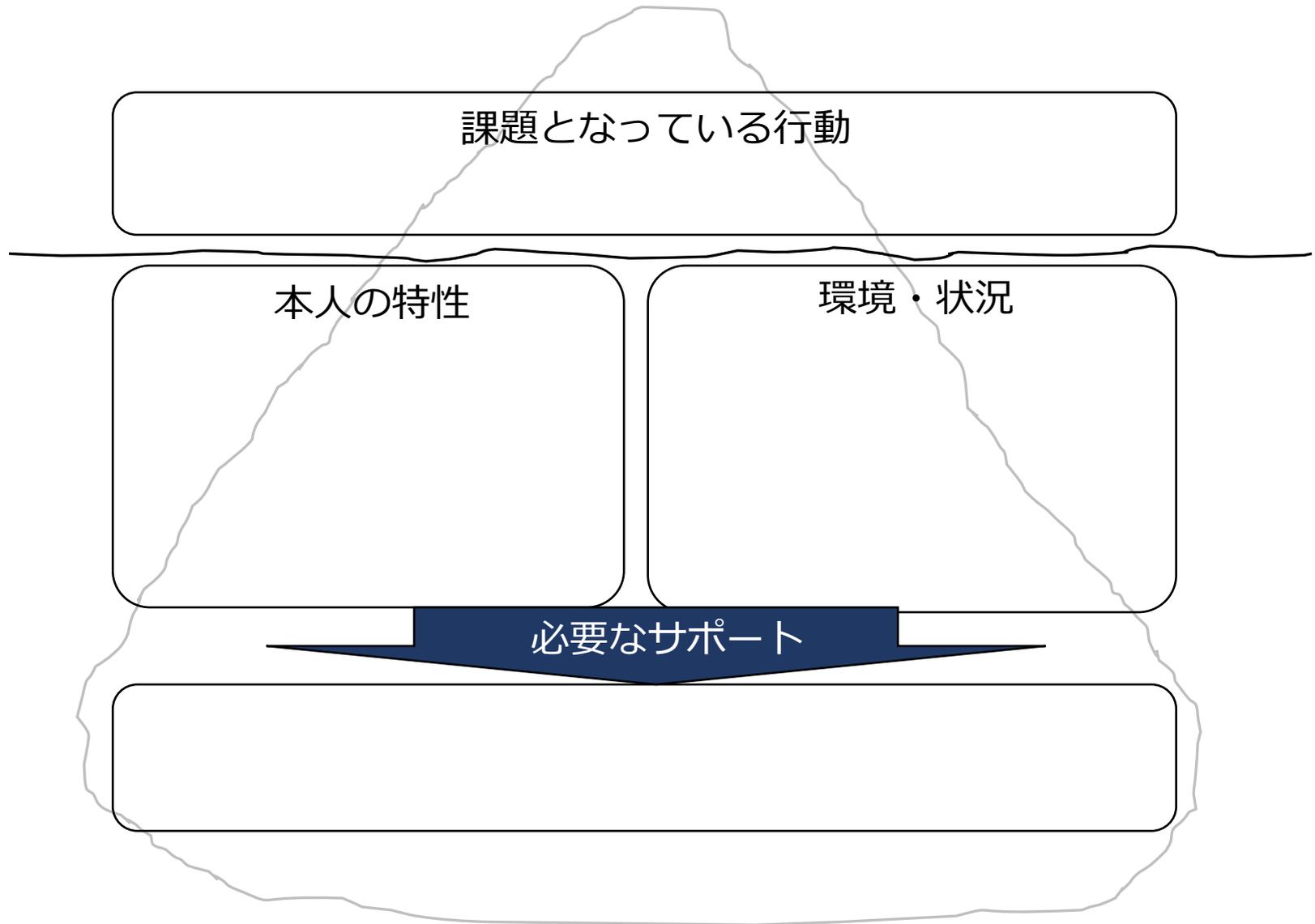
よりよい人生へと向かう

# ICF（国際生活機能分類）とは

- ▶ International Classification of Functioning, Disability and Health 2001年5月 WHO総会で採択
- ▶ ■人間全体を見る ■個別性をとらえる ■サービスの効果を全体的にとらえる ものとして使われている



# これが「冰山モデルシート」です



課題となっている行動

本人の特性

環境・状況

必要なサポート

# これが「支援手順書（例）」です

支援手順書/記録用紙

日付け	20〇〇年〇月×日	氏名	Tさん	記入者	支援員B
工程	本人の動き	支援者の動き・留意点		本人の様子(記録)	
事前準備		スケジュールに活動カードをセット。 お茶をカバンに入れる。			
スケジュール確認	出発前に支援者と一緒にスケジュール確認	Tさんに見えるようにスケジュールを示し、活動カードを1つ1つ指差しして予定を最後まで確認する。 最後まで確認できたらカバンを渡して出発するように促す。			
散歩	公園に向かって歩く	Tさんの横を歩き、通行人や車をぶつからない様に注意する。 ぶつかりそうな時はTさんの前に出てジェスチャーで止まる様に促す。 公園に近づくと走り出すことがあるので、横断歩道の前で本人の前に出て身体の前へ手を出すジェスチャーで止まる様に促し、支援者が安全確認する。			
公園	公園の入り口でスケジュール確認 ブランコで遊ぶ お茶を飲む	公園の入り口でスケジュール確認(活動カードを外す)。 ブランコに移動、本人が満足するまで遊んでもらう。 満足して動き出したら、次のスケジュールを示しベンチに移動。 ベンチでスケジュール確認(活動カードを外す)、お茶を飲む。 終わったら次の活動を伝える。 * Tさんが水遊びを始めた時は、タイマーを3分にセットし、Tさんに見える様にセットし、「3分でおしまい」と声かけ。 タイマーがなったらTさんが水道を止めるので、次の活動を促す。			
外食	飲食店に行き食事をする	お店の前で走り出すことがあるので、本人の前へ出てジェスチャーで止まってもらい支援者が安全確認。 店前でスケジュール確認(活動カードを外す)。 メニュー表を見せると、食べたいものを指差すので、支援者が注文、購入する。 食事は見守りする。 食べ終わったら次の予定を伝える。			
帰宅	自宅に戻る	スケジュール確認(活動カードを外す)。 家族にTさんの様子を伝える。			

**\* スケジュール確認の手順**

- ・スケジュールカードを指差し、次の活動を単語で伝える
- ・活動場所に着くとカードを外しポケットに入れる
- ・次の活動を伝える際はスケジュールカードを指差し、単語で伝える

**\* 本人と関わる際の留意点**

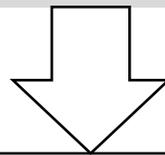
- ・声かけは最小限にする(声かけが多くなると混乱しやすいため)
- ・公園やお店の近くでは目的に向かって急に走り出すことあり
- ・事前にジェスチャーで止まる様に促し支援者が安全確認する

# ①強度行動障害の理解

- ・強度行動障害の状態

# 「強度行動障害」とは

自傷、他傷、こだわり、もの壊し、睡眠の乱れ、異食、多動など本人や周囲の人のくらしに影響を及ぼす行動が、著しく高い頻度で起こるため、特別に配慮された支援が必要になっている状態を意味する用語



- × もともとの障害
- その人の状態のこと

# ①強度行動障害の理解

- ・ 行動障害が起きる理由

障害からくる苦手さを持つ人たちは、困っています。

## 障害からくる苦手さ

先の予測をすることが難しい

見えないものの理解が難しい

話し言葉の理解が難しい

抽象的であいまいな表現の理解が難しい

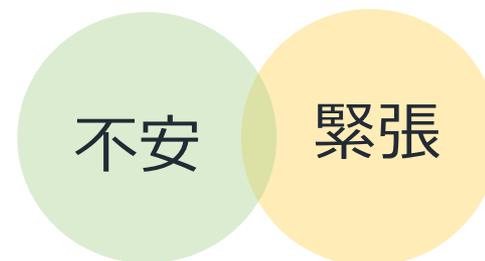
話し言葉で伝えることが難しい

やりとりの量が多いと処理が難しい

少しの違いで大きな不安を感じる

聴覚の過敏や鈍麻がある

⋮



不安や緊張から

逃れたい

不安や緊張を

伝えたい

不安や緊張に

気づいてほしい

でも方法がわからない



気持ちを **行動** で表す



- そのまま、障害からくる苦手さが解消されないと、さらに、激しい行動をとることがあります。



- また、適切な行動を覚えてもらう機会がなかったり
- 自分の気持ちを伝えるために激しい行動を取った時、周囲がその行動を止めるために本人が望むままの対応を繰り返していると、「激しい行動をすることで自分の気持ちが伝わる」と理解し、激しい行動が定着してしまうこともあります。

このように、

- ☑ 適切な行動を教えられていない
- ☑ 周囲が誤った対応を繰り返す



行動が激しくなっていく

= 「強度行動障害の状態」

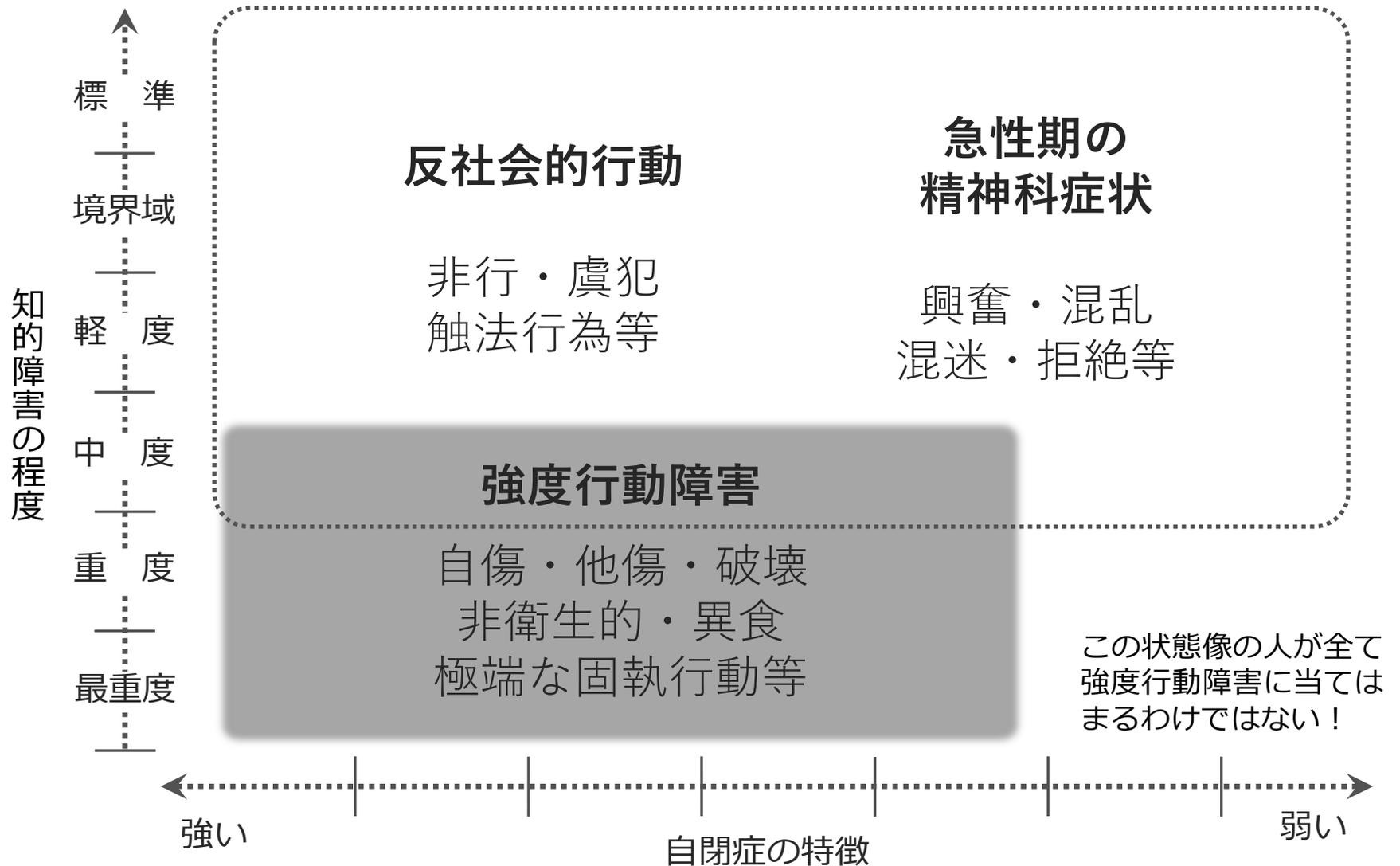
といいます。

## ②強度行動障害の理解

- ・ 障害特性の理解

なぜ自閉症の特性を学ぶのか

# 強度行動障害になりやすいのは



強度行動障害と自閉症の関連性が高いと言われて  
います。

したがって、強度行動障害への支援を学ぶため  
には、まず自閉症のことを知ることが大切です。

# 強度行動障害に関する調査結果①

岡山県が実施した2019年度 強度行動障害に関する  
実態調査報告書より

- 療育手帳所持者の2%が強度行動障害
  - ちなみに、強度行動障害リーフレット（平成25年度厚生労働省）によれば、推計値として、強度行動障害得点10点以上の人が療育手帳所持者の概ね1%程度（全国で約8000人）あるとしている。

# 強度行動障害に関する調査結果②

岡山県が実施した2019 年度 強度行動障害に関する  
実態調査報告書より

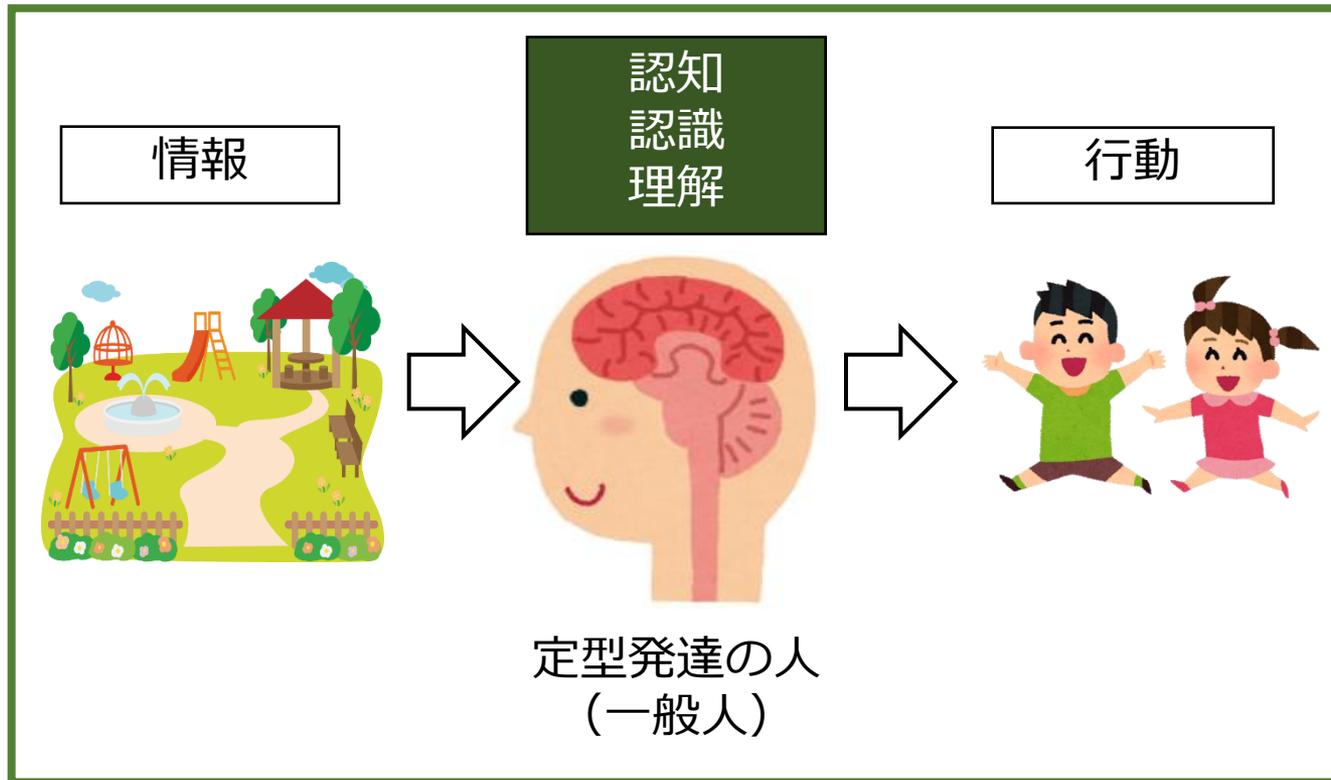
- 知的障害あり（96.6%）、自閉症あり（52.6%）
- 知的障害と自閉症を併せ持つ人は50.8%  
→強度行動障害リーフレット（平成25年度厚生労働省）には「強度行動障害になりやすいのは、重度・最重度の知的障害があったり、自閉症の特徴が強い『コミュニケーションが苦手な人』です」という記載がある。
- 強度行動障害がある人を支援している機関は、  
障害者支援施設：77.1%、生活介護事業所：50.0%  
就労継続支援 B 型事業所：4.2%、  
支援学校：33.3%、精神科医療機関：44.4%

自閉症について

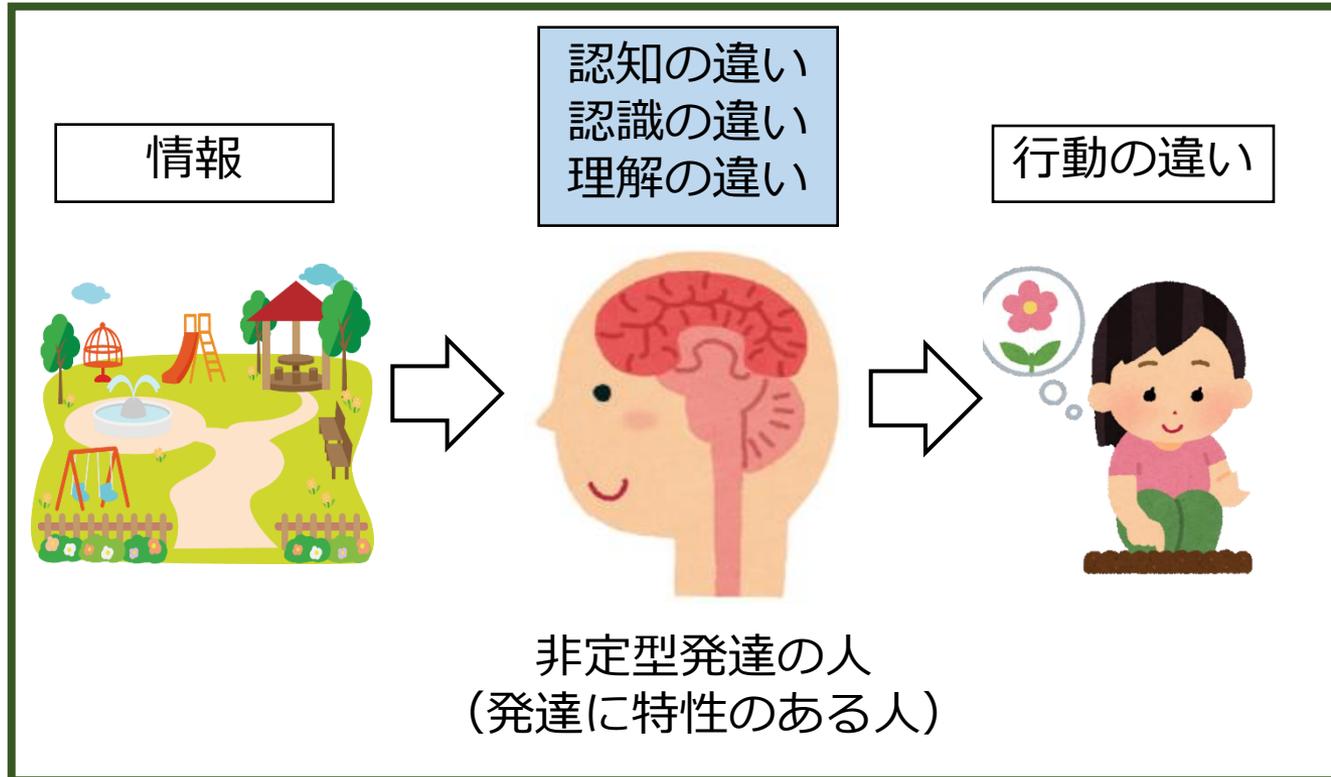
- 現在、自閉症のことを正式には「自閉スペクトラム症」もしくは「自閉症スペクトラム障害」と呼びます。いろいろなタイプがいて、境目のない連続体として広がっているという考え方です。
- 自閉症は、社会性やコミュニケーションの困難、想像力（目の前にないことをイメージすること）の困難が診断基準となり、感覚の特異性も診断の際に考慮されます。



人は情報を脳で処理をして行動をしている。



# 自閉症は脳の機能的な障害



自閉症の特性を整理する

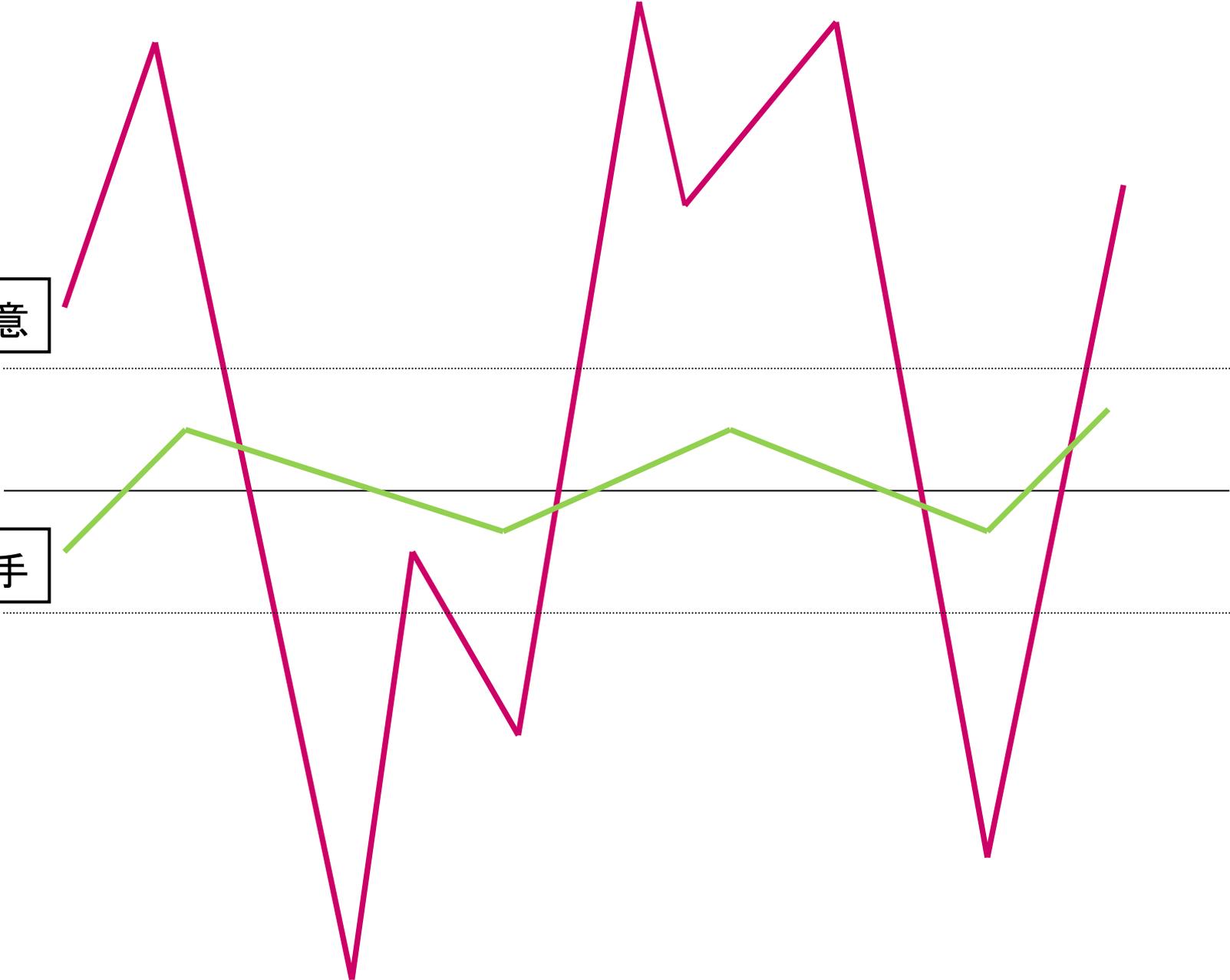
## なぜ、自閉症の特性を整理するのか

- 自閉症の人たちは社会では少数派です。その物事のとらえ方は、多くの人たちとは異なります。自閉症の人たちがどのような物事のとらえ方をしているのかは、特性を把握し整理することで見えてきます。

- 特性は、「強み」と「弱み」と言い換えることもできます。「強み」は支援に生かすもので、「弱み」は支援者が配慮するところと言えます。それゆえ、特性の把握においては「強み」と「弱み」の両面を整理しておくことが重要です。

得意

苦手



- 自閉症の人たちの物事のとらえ方に合わせた支援をすることで、自閉症の人たちは適切に学ぶことができ、強度行動障害という状況に陥ることなく、よりよい生活を送ることができます。
- 私たちは、自閉症の人たちの特性を常に学び、支援の基盤に置く必要があるのです。

ここでは、自閉症の特性を次のように整理しています。

- 社会性の特性
- コミュニケーションの特性
- 想像力の特性
- 感覚の特性

# 視点① 社会性の特性

## 【人や集団との関わりに難しさがある】

- ・ 相手への関心が薄い
- ・ 相手から期待されていることを理解することが難しい
- ・ 相手が見ているものを見て、相手の考えを察することが難しい

## 【状況の理解が難しい】

- ・ 周囲で起こっていることへの関心が薄い
- ・ 周囲の様子から期待されていることを理解することが難しい
- ・ 見えないものの理解が難しい

☆自分がすべきことが明確であれば、集団への適応が増す。

# 視点② コミュニケーションの特性

## 【理解が難しい】

- ・話し言葉の理解が難しい
- ・一度にたくさんのかを理解するのが難しい
- ・抽象的であいまいな表現の理解が難しい

## 【発信が難しい】

- ・話し言葉で伝えることが難しい
- ・どのようにして伝えたらいいか分からない
- ・誰に伝えていいか分からない

# 視点② コミュニケーションの特性

## 【やりとりが難しい】

- ・ 場面や状況に合わせたコミュニケーションが難しい
- ・ 表情や視線などの非言語コミュニケーションが難しい
- ・ やりとりの量が多いと処理が難しい

☆話し言葉だけではない、たとえば目に見えるツールを活用することで、伝達度が増す。

# 視点③ 想像力の特徴

※想像力：目の前にないことをイメージする力

## 【自分で予定を立てることが難しい】

- ・ 段取りを適切に組むことが難しい
- ・ なんとなく、だいたいなどのイメージを持ちにくい
- ・ 今やることを自分で判断することが難しい

## 【変化への対応が難しい】

- ・ 先の予測をすることが難しい
- ・ 臨機応変に判断することが難しい
- ・ 自分のやり方から抜け出すことが難しい

# 視点③ 想像力の特徴

## 【物の一部に対する強い興味】

- ・興味・関心が狭くて強い
- ・細部が気になり違いに敏感
- ・少しの違いで大きな不安を感じる

☆目の前に存在する視覚情報があるとわかりやすさが増す。

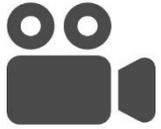
☆自分が興味・関心のある対象への思いが強みになることも多い。

## 視点④ 感覚の特性

### 【感覚が過敏または鈍感】

- ・聴覚の過敏や鈍麻がある
- ・視覚の過敏や鈍麻がある
- ・触覚の過敏や鈍麻がある
- ・嗅覚の過敏や鈍麻がある
- ・味覚の過敏や鈍麻がある
- ・前庭覚の特有の感覚がある

☆感覚に関する反応が、心身の状況や調子のバロメーターとなることも多い。



ここで動画を見ましょう

学びと肯定的理解の重要性

- 「理解に始まって理解に終わる」のが支援なので、わかったつもりにならないことが大切です。
- 基礎基本の学びをおろそかにせず、基礎基本にいつも立ち返ることはとても重要です。

苦手なことには配慮し、得意なことは活かすのが支援の基本です。

繰り返しになりますが、

得意なことを把握することはとても大切です

（苦手とされていることも「ここまではできる」という見方もできるし、視点を変えれば「強み」になることもあるはずです）。

## ③ 支援のアイデア

- ・ 障害特性に基づいた支援

目で見えてわかる支援が基本

# 目で見えてわかる支援をするのはなぜか？

- 自閉症の人は目に見えないことの意味を理解したり思いを伝えたりすることに苦手さがあるから
- 複数の情報を処理することに苦手さがあるから
- 雑多な環境の中から必要な情報に目を向けることに苦手さがあるから

# 目で見えてわかる支援をするために

- わかりにくい情報や生きにくい環境で暮らしている人たち。一人一人にわかりやすい形で届けたり整理したりする必要がある
  - = その人に合わせた支援
  - = 合理的配慮

支援のポイントは  
どこにあるか

# 確実に伝えたい6つの情報

- 「いつ」
- 「どこで」
- 「何を」
- 「どのくらい」
- 「どうやって」
- 「次は」

# 6つの情報を確実に伝えるための5つの工夫

- 時間の工夫（生活の見通し）
- 場所の工夫（活動との対応・刺激の整理）
- 方法の工夫（やり方・終わり・次）
- 見え方の工夫（ヒント・着目）
- やりとりの工夫（コミュニケーションツール）

## 時間の工夫（生活の見通し）

- どんな流れで生活するのかという理解を助ける。
- 言われるがまま（または好き放題）ではなく、自分で適切に情報をキャッチし行動できることを大事にする。

## 場所の工夫（活動との対応・刺激の整理）

- この場所では何をするのかという理解を助ける。
  - 整理整頓は基本中の基本
  - エリア（境界）を明確に
  - 場所と活動とが1対1対応できれば理想だが…
- 苦手な刺激を少なくするための配慮をする。

## 方法の工夫（やり方・終わり・次）

- 「何を」「どのくらい」「どうやって」「次は」という理解を助けるために
  - やることの内容や数や順序が違ってても進め方は同じという“システム”を提示する。

## 見え方の工夫（ヒント・着目）

- 見てすぐにわかる情報を提示するために
  - 必要な情報に注目しやすくする工夫
  - 見るだけで何をすれば良いかがわかる工夫
  - 情報や材料が見やすい・扱いやすい工夫

# やりとりの工夫 (コミュニケーションツール)

- 伝え合いわかり合うコミュニケーションのために
  - コミュニケーションの手続きを視覚的に示し、コミュニケーションの成功体験をサポート

支援を見直すことの重要性

- 自閉症の特性に基づいた予防的な支援を展開しても、うまくいかないことは当然出てきます。そんなときは、改めて今までの支援を見直し、支援の補整や補強をしていきます。
- この見直し作業を繰り返しながら、本人に合った支援を整え、本人が力を発揮しやすい環境をつくっていくのです。

## ④ 基本的な情報収集

- ・ 行動を見る視点

# 「行動チェックシート」

行動チェックシート

		例	✓	本人の具体的な行動
社会性	人や集団との関係に難しさがある	ア: 視線が合わない		
		イ: 人との関わりが一方的であることが多い		
		ウ: 相手の気持ちに関係なく行動する		
	状況の理解が難しい	エ: 周囲に合わせて行動できない		
		オ: 周囲の状況に対して興味を示さない		
		カ: 危険や迷惑、社会のルールに関係なく行動する		
コミュニケーション	理解が難しい	キ: 言葉で指示をしても行動できない		
		ク: 言葉で指示されたことと違うことをする		
		ケ: 相手の言葉をそのまま繰り返す (エコーリア)		
	発信が難しい	コ: 行動や仕草などで自分の気持ちを現わす		
		サ: 言葉で自分の気持ちを伝えることができない		
		シ: 言葉はあるが自分の気持ちを的確に伝えることができない		
	やりとりが難しい	ス: やりとりがかみ合わない		
		セ: やりとりが続かない		
		ソ: 唐突に話し始めたり、黙り込むことがある		
想像力	自分で予定を立てることが難しい	タ: やることがないときにウロウロしている、じっとしている		
		チ: 自分から動くことができない		
		ツ: 予定の変更で混乱することが多い		
	変化への対応が難しい	テ: 自分のルールを変えると混乱することが多い		
		ト: 日課が変更されると混乱することが多い		
		ナ: 活動を途中でやめたり、変更することができない		
	物の一部に対する強い興味	ニ: 特定の物などへのこだわりや執着がある		
		ヌ: 自分の興味があるもの以外に関心を示すことができない		
		ネ: 細かいことが気になってやるべきことができないことがある		
感覚	感覚が敏感または鈍感	ノ: 耳を塞ぐ、特定の音を嫌がる、特定の音を大音量にする、などの行動がある		
		ハ: 眩しがる、目を閉じる、蛍光灯を嫌がる、キラキラに没頭する、などの行動がある		
		ヒ: 特定の感触に没頭する、極端に嫌がる、または感じていないような行動がある		
		フ: 著しい偏食、刺激の強い味を好む、同じものばかり食べる、など行動がある		
		ヘ: 特定の臭いを嗅ぎたがる、極端に嫌がる、臭いで入れない場所がある、などの行動がある		
		ホ: クルクル回る、ロッキングが多い、高い場所が好き、不器用等、身体の動かし方に特徴がある		

# 行動を見る視点の大切さ

- ここまでの講義で、強度行動障害の状態にある人たちは、自分の気持ちをうまく訴えられない特性があることを学びました。
- うまく訴えられない人たちのことを理解するためには、行動が手がかりになります。
- 行動をきちんと観察することで、本人の訴えたいことだけでなく、障害の特性を理解することにもつながります。
- 客観的に観察することで、行動の背景にはさまざまな苦手さがあることに気がつくことができます。

# まとめ

本人の行動は「困っている」サインかもしれません

- 本人の行動をヒントに
- 特性に気づき
- 適切な支援を組み立てていくことで

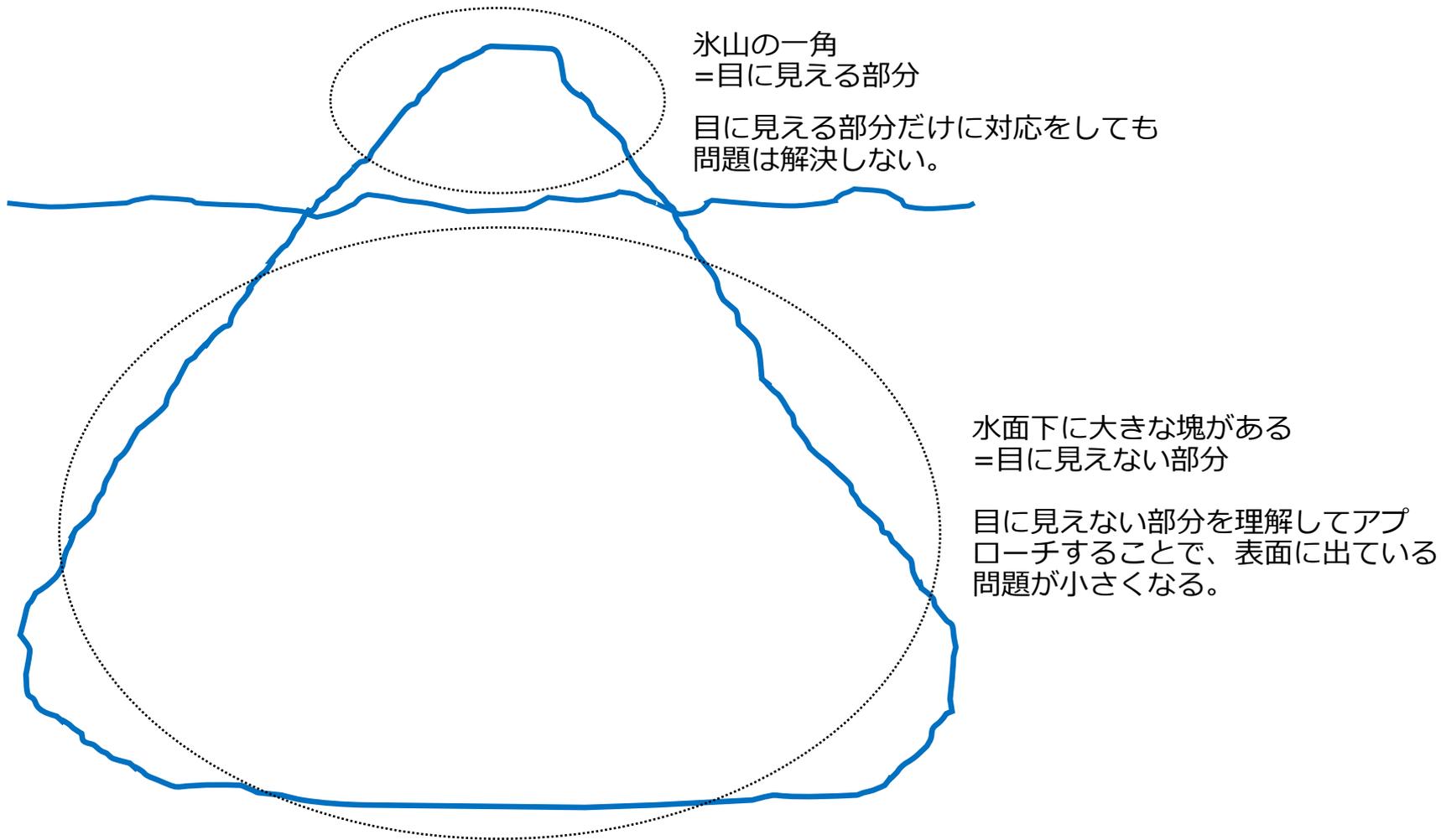


**支援も本人の活動も成功しやすくなります**

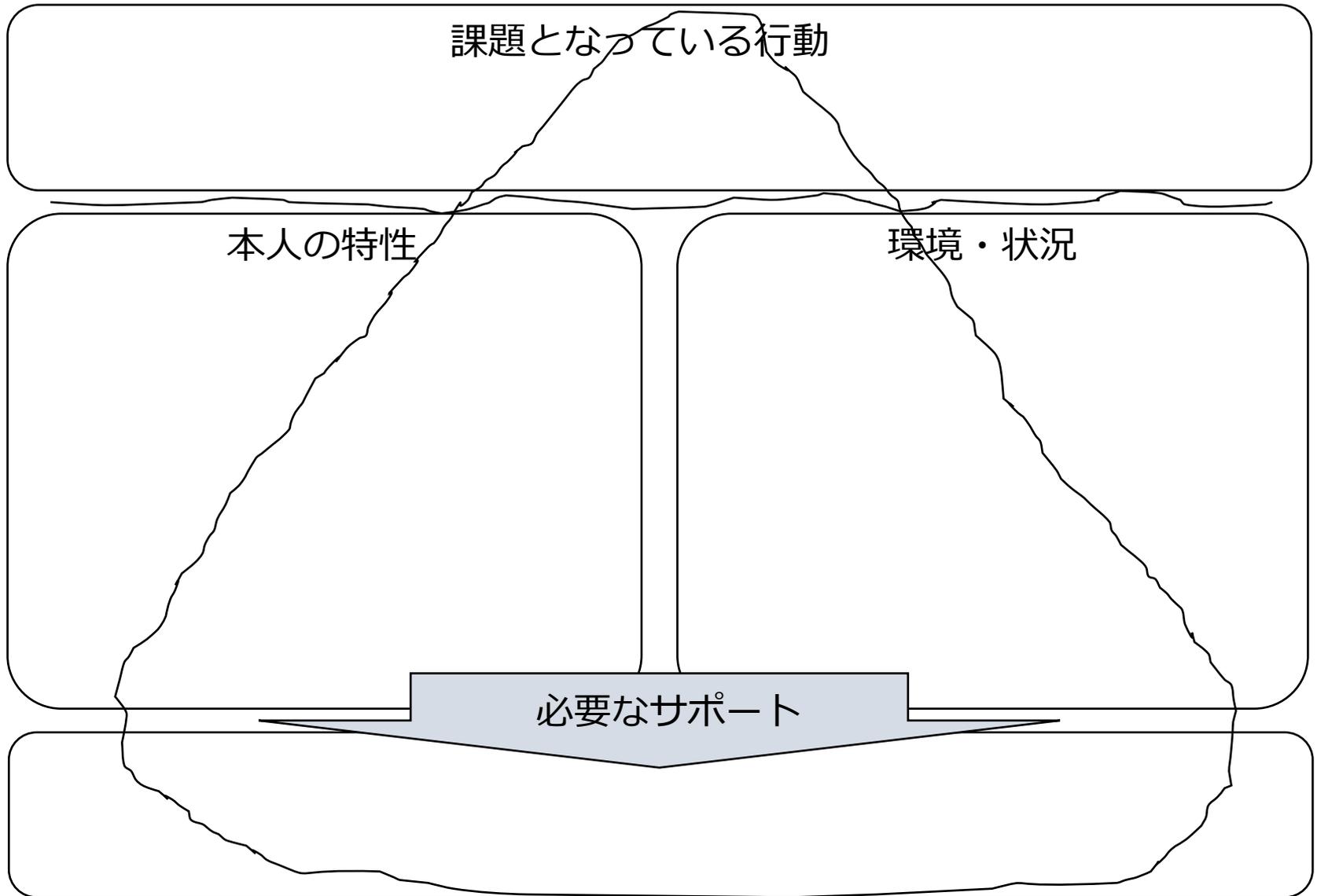
## ⑤特性の分析

- ・特性の把握と適切な対応

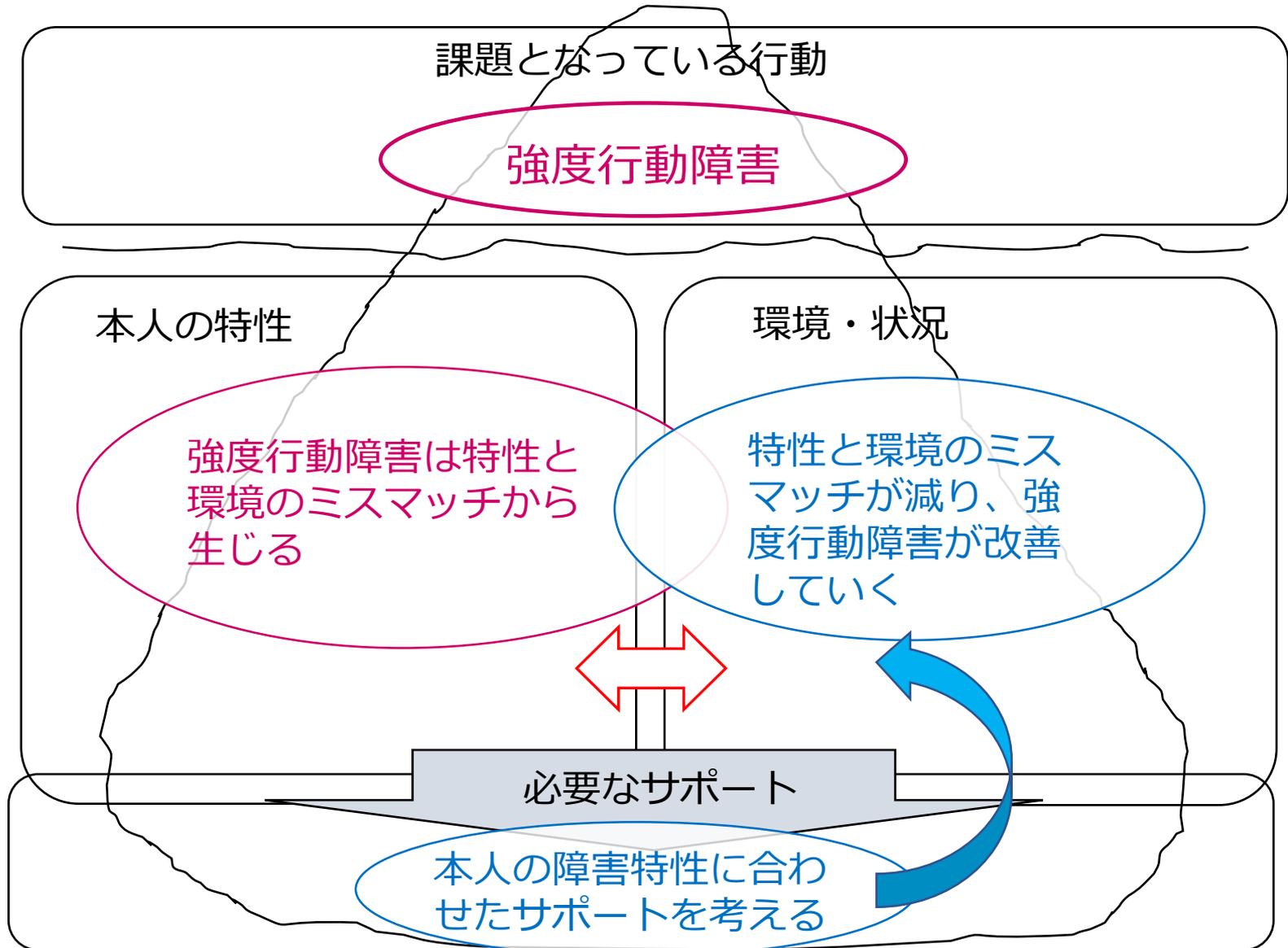
# 行動の背景を知るための「冰山モデル」



# 氷山モデルシート



# 冰山モデルシート





# 氷山モデルシートと補足シートの関係

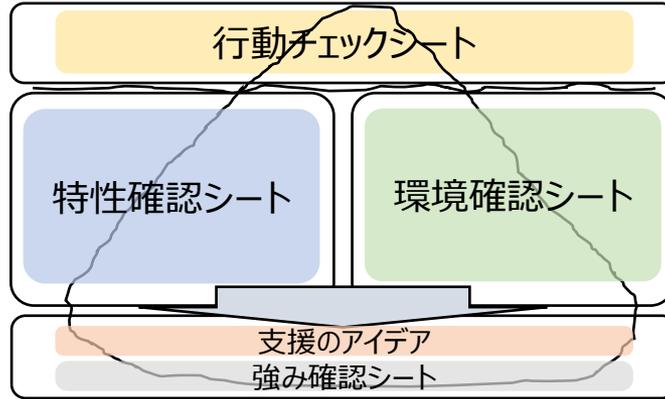
行動チェックシート	
1. 目標を設定する	2. 目標を達成するための行動計画を立てる
3. 計画に沿って行動する	4. 進捗を確認し、必要に応じて計画を修正する
5. 目標達成後に振り返りを行う	6. 成功要因や課題を分析する
7. 今後の行動計画を立てる	8. 目標達成に向けた継続的な努力を行う

## 行動チェックシート

特性確認シート	
1. 対象者の基本情報を確認する	2. 対象者の背景や環境を確認する
3. 対象者の行動パターンを確認する	4. 対象者の感情や態度を確認する
5. 対象者の能力やスキルを確認する	6. 対象者の価値観や信念を確認する
7. 対象者のニーズや課題を確認する	8. 対象者の強みや得意分野を確認する
9. 対象者の学習スタイルを確認する	10. 対象者のコミュニケーションスタイルを確認する
11. 対象者のモチベーションを確認する	12. 対象者のストレスレベルを確認する
13. 対象者の学習成果を確認する	14. 対象者の学習態度を確認する
15. 対象者の学習意欲を確認する	16. 対象者の学習習慣を確認する
17. 対象者の学習環境を確認する	18. 対象者の学習資源を確認する
19. 対象者の学習態度を確認する	20. 対象者の学習成果を確認する
21. 対象者の学習意欲を確認する	22. 対象者の学習習慣を確認する
23. 対象者の学習環境を確認する	24. 対象者の学習資源を確認する
25. 対象者の学習態度を確認する	26. 対象者の学習成果を確認する
27. 対象者の学習意欲を確認する	28. 対象者の学習習慣を確認する
29. 対象者の学習環境を確認する	30. 対象者の学習資源を確認する

## 特性確認シート

## 支援のアイデア



環境確認シート		
目的	環境確認の目的	関係者の役割
人	関係者	
物	環境	
場所	環境	
状況	環境	
原因	環境	
対策	環境	
留意	環境	
その他	環境	

## 環境確認シート

強み確認シート	
1. 対象者の強みを確認する	2. 対象者の強みを活かすための支援策を確認する
3. 対象者の強みを活かすための学習機会を確認する	4. 対象者の強みを活かすための学習環境を確認する
5. 対象者の強みを活かすための学習資源を確認する	6. 対象者の強みを活かすための学習態度を確認する
7. 対象者の強みを活かすための学習習慣を確認する	8. 対象者の強みを活かすための学習成果を確認する
9. 対象者の強みを活かすための学習意欲を確認する	10. 対象者の強みを活かすための学習習慣を確認する
11. 対象者の強みを活かすための学習環境を確認する	12. 対象者の強みを活かすための学習資源を確認する
13. 対象者の強みを活かすための学習態度を確認する	14. 対象者の強みを活かすための学習成果を確認する
15. 対象者の強みを活かすための学習意欲を確認する	16. 対象者の強みを活かすための学習習慣を確認する
17. 対象者の強みを活かすための学習環境を確認する	18. 対象者の強みを活かすための学習資源を確認する
19. 対象者の強みを活かすための学習態度を確認する	20. 対象者の強みを活かすための学習成果を確認する
21. 対象者の強みを活かすための学習意欲を確認する	22. 対象者の強みを活かすための学習習慣を確認する
23. 対象者の強みを活かすための学習環境を確認する	24. 対象者の強みを活かすための学習資源を確認する
25. 対象者の強みを活かすための学習態度を確認する	26. 対象者の強みを活かすための学習成果を確認する
27. 対象者の強みを活かすための学習意欲を確認する	28. 対象者の強みを活かすための学習習慣を確認する
29. 対象者の強みを活かすための学習環境を確認する	30. 対象者の強みを活かすための学習資源を確認する

## 強み確認シート

# 冰山モデルシートが完成しました

## 課題となっている行動 水遊びを止められて自傷をする

### 本人の特性

- 1) 相手への関心が薄い
- 5) 周囲の様子から期待されていることを理解するのが難しい
- 6) 見えないものの理解が難しい
- 7) 話し言葉の理解が難しい
- 11) どのようにして伝えたらいいかわからない
- 18) 今やることが自分で判断することが難しい
- 19) 先の予測をすることが難しい
- 22) 興味関心が狭くて強い
- 25) 聴覚の過敏や鈍麻がある
- 27) 触覚の過敏や鈍麻がある

### 環境・状況

人：支援者は言葉で指示を出している  
物：水道が見えやすい場所へ出かけている  
場所：公園での目的が柵でゆれるか、水道で遊ぶかに見えていた  
状況：どうなったら終わりかがわかりにくい  
状況：公園に何をしに行ったのかわからない

### 必要なサポート

#### (支援のアイデア)

- C) 「いつ」「どこで」「何を」の情報を見てわかるように伝える
- D) 本人が理解できる見える情報で伝える
- G) 本人に分かりやすく予定を伝える

#### (本人の強み→活かせるような場面や状況)

- ・お茶を見せるとベンチに座って飲むことがわかる→活動の切り替えにお茶を使えないか
- ・絵本の「くるま」を見て「外出」するのだと理解したことがある→イラストで活動を知らせられないか
- ・物に注目できる→タイマーなどで終わりを伝えられないか
- ・揺れる感覚に没頭することがある→揺れる感覚で適切な遊びを提供できないか

# まとめ

- 課題となる行動には、障害特性に起因する何らかの理由がある
- 「冰山モデル」を使った行動の背景を捉える考え方が有効
- 「本人の特性」と「環境や状況」を整理し、課題となっている要因を明らかにすることが根拠に基づいた適切な支援の第1歩
- 導き出された支援のアイデアは、本人の強みを使って具体化される

## ⑥ チームプレイの基本

- ・ チームプレイの必要性

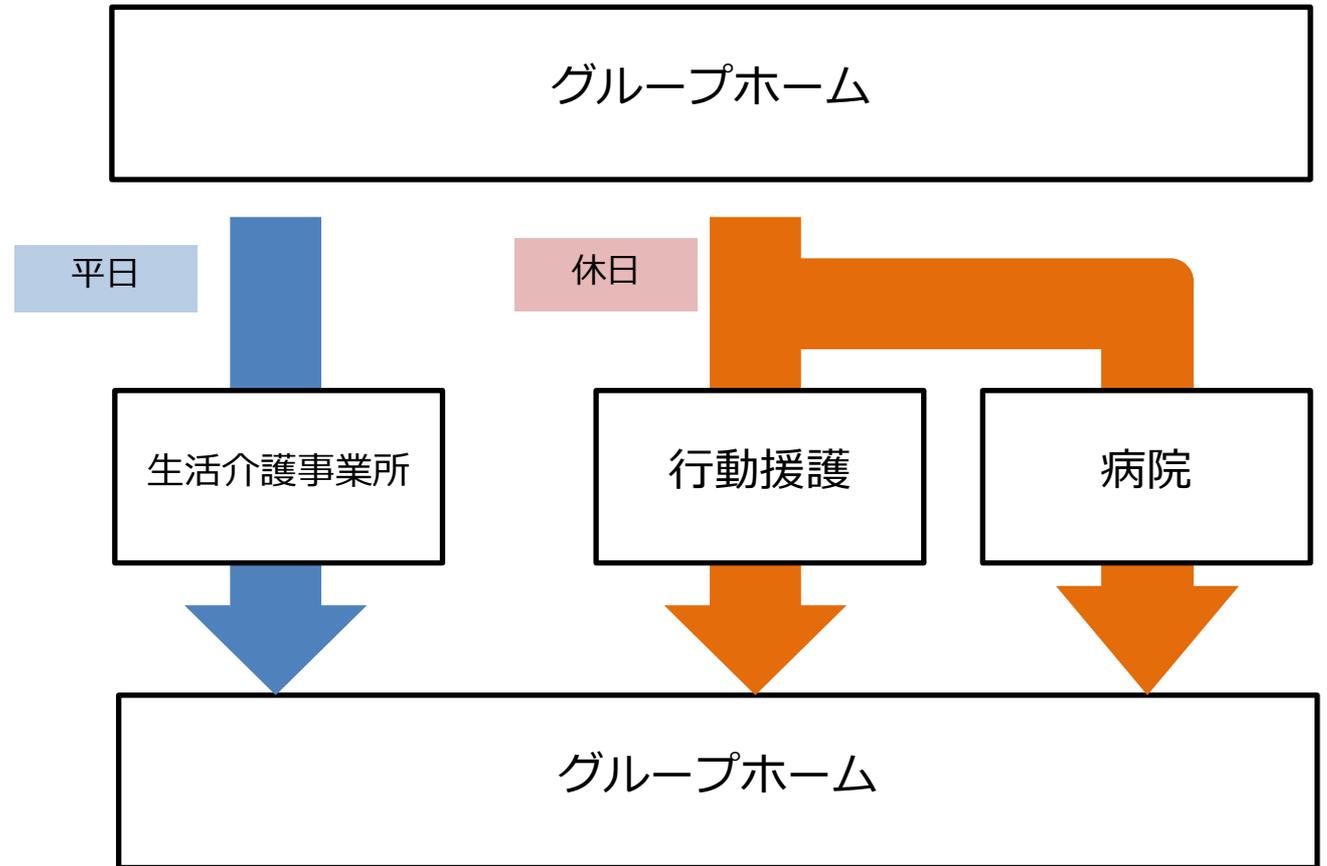
チームで支援する必要性

一日で考えてみると、  
様々な生活場面で成り立っている。

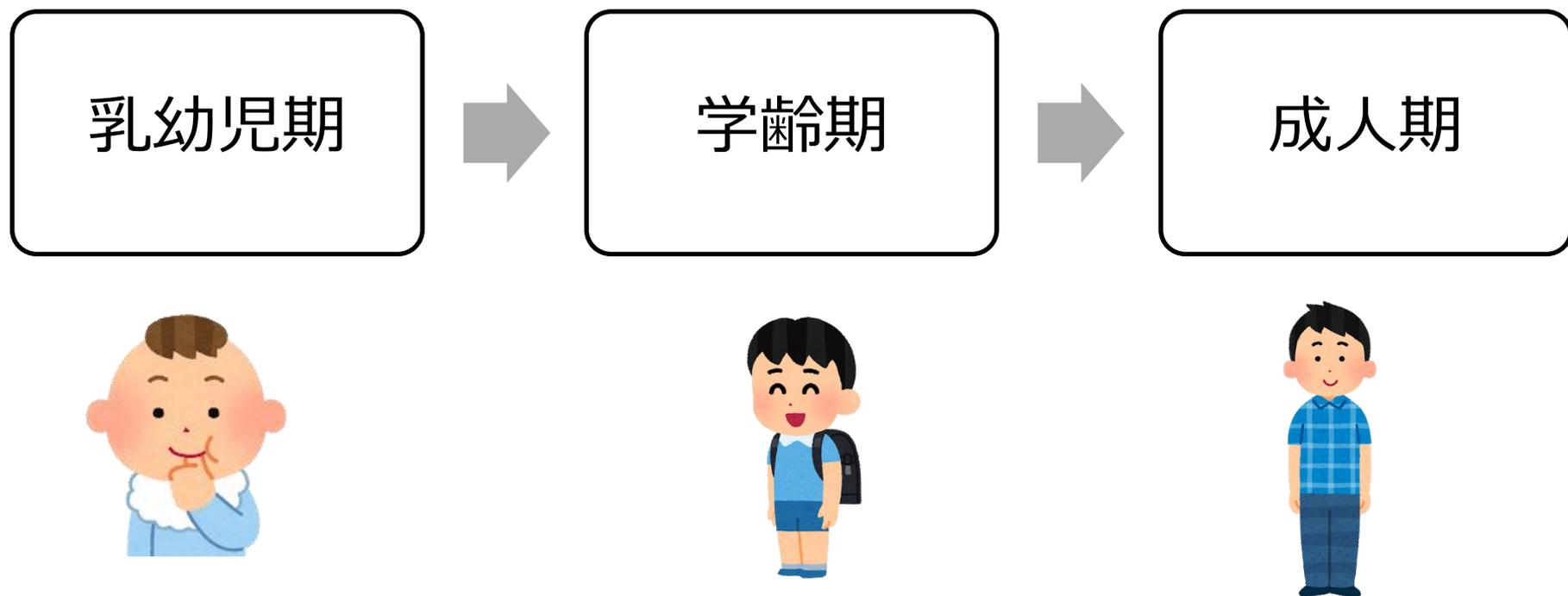
- 暮らしの場面（家庭やグループホームなど）
- 日中活動の場面（保育園や学校、福祉事業所など）
- 外出の場面（家族や行動援護など）

→それぞれの場面で関わる関係者がちがう。

# 田中さんの一日



# 田中さんのライフステージ

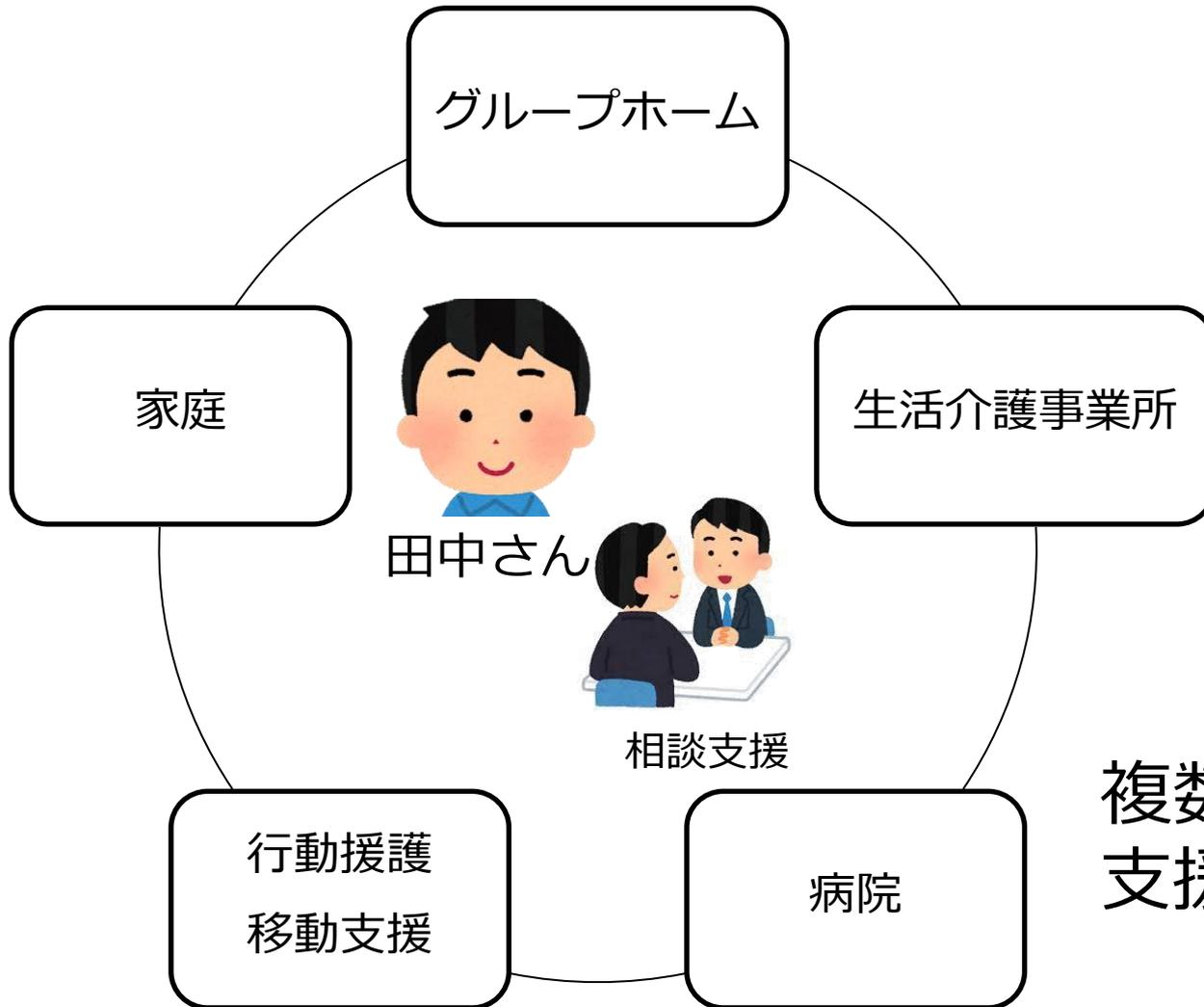


乳幼児期から成人期まで、様々なライフステージがあり、それぞれに事業所や支援者が関わる

本人の現在の生活は、  
さまざまな関係者で支えられています。

支援チームをつくる

# 田中さんの生活



複数の事業所や  
支援機関が関わる

事業所の中でも、  
複数の職員が本人に関わります。

# グループホーム



田中さん

世話人Aさん

世話人Bさん

グループホーム  
管理者

世話人Cさん

複数の支援者が関わる

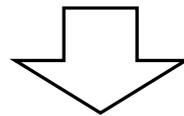
- I その人の特性や人生のニーズを把握する
- II その人の特性に配慮した支援を考える
- III その人の人生のニーズに沿った計画と実践、評価や改善のサイクル（PDCAサイクル）で、よりよい人生へと向かう

※PDCAサイクルとは、Plan（計画）・Do（実行）・Check（評価）・Action（改善）を繰り返すことによって、業務を継続的に改善していく手法のことです。支援を考える際もこのサイクルを重視します。

- IV 支援が停滞したり強度行動障害の様相が現れたりしたときには、改めて支援を見直し、支援の補整や補強をする

関係者が必要な支援や特性を共有することが重要

それぞれの関係者が、本人の特性に関係なく、  
思い思いのやり方で接してしまうと・・・



本人が混乱してしまう。

それぞれの場面やライフステージにおける関係者が、  
本人を支えるチームのメンバーとして、  
本人の特性や配慮すべきことについて共通の認識を持ち、  
同じ方針に沿った統一した支援をしていくことが大切。

統一した支援をするために

# チームにおける情報共有や連携の方法

- 日頃からお互いに頻繁なやりとり（情報共有）  
をする
- 個別の支援会議（ケース会議）を開催する
- サービス等利用計画
- 個別支援計画
- 支援手順書

# 日頃からお互いに 頻繁なやりとり（情報共有）をする

- 体調
- 生活リズム（睡眠や食事、排泄など）の変化
- 日課などの環境の変化
- 強度行動障害などの課題となる行動の有無

# 個別の支援会議（ケース会議）を開催する



- 情報の共有
- 記録方法
- うまくいかない時の対応

サービス等利用計画・  
個別支援計画・支援手順書

# 本人ニーズに基づく支援計画

## 「本人ニーズ」

夢や目標、支援してほしいこと、困っていること

- ・ コミュニケーションの苦手さを補う支援
- ・ 困りごとの背景にある障害特性や環境要因を知る
- ・ 自己決定のための本人にあった情報提供

本人ニーズに基づく支援計画を考えるためには、  
特性の理解とアセスメントの視点が欠かせない

# サービス等利用計画



本人の望む生活に対し、支援機関がそれぞれどのような役割を果たしチームで支えていくことを示したもの

ご本人の望む生活や目標

サービス等利用計画



グループホーム



日中活動や就労の支援

全体の計画



相談支援

# 個別支援計画

サービス等利用計画で示された役割を基に、支援機関ではどのような目標をもち、何に配慮して支援をするのか、具体的な目標と支援内容を記入した計画

ご本人の望む生活や目標

サービス等利用計画



グループホーム

個別支援計画



日中活動や就労の支援

個別支援計画

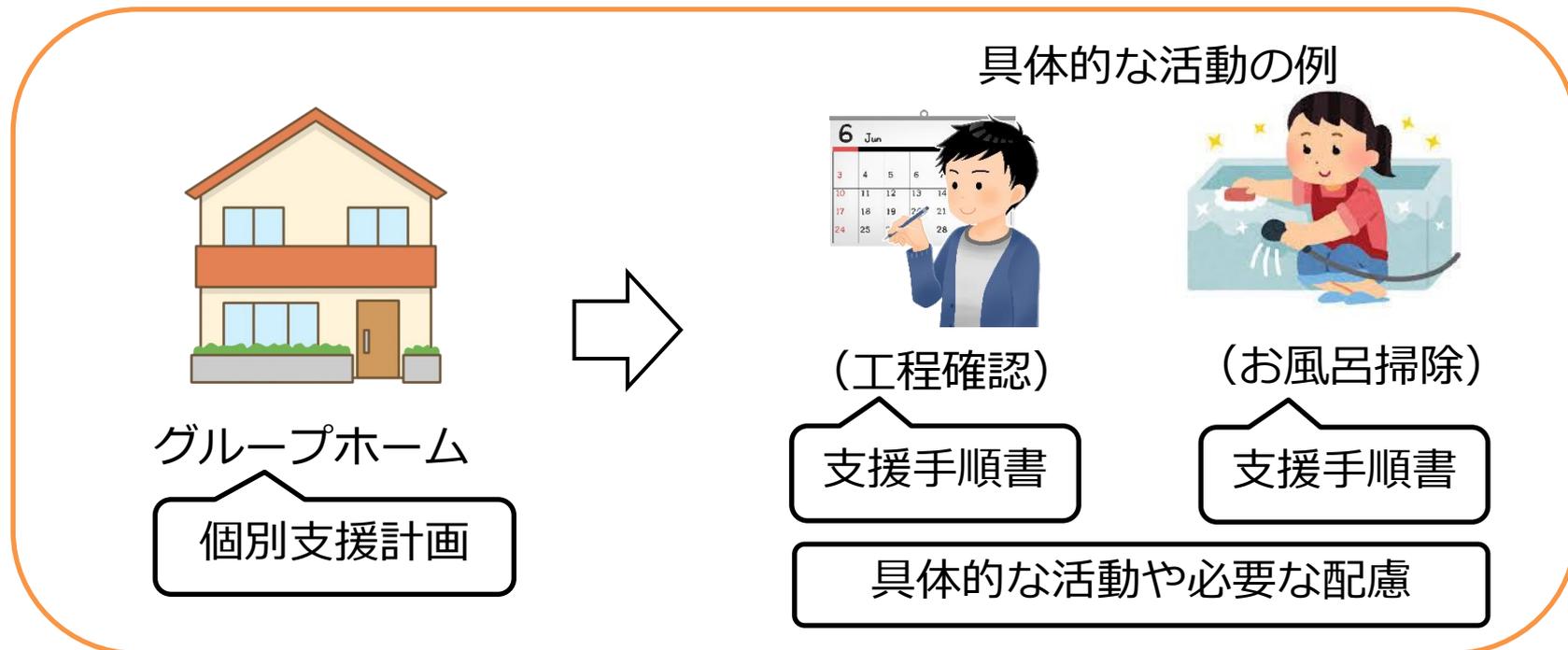
全体の計画



相談支援

# 支援手順書

個別支援計画の内容から、具体的な活動とその工程・必要な配慮の方法などをその人に合わせて詳細に記入したもの



# 「支援手順書」の例 1 (文字)

時間	活動	サービス手順
9:30-10:00	来所	【スケジュール1：朝の準備】 静養室（スケジュール）→静養室（着替え）→静養室（休憩）→アラーム（9:50）→作業室
10:00-10:45	班別活動	【スケジュール2：DVD組み立て×2回】 作業室（作業15分）→静養室（休憩10分）→アラーム→トイレ→静養室（スケジュール）→作業室（作業15分）
10:45-11:00	お茶休憩	【スケジュール3：お茶休憩】 作業室→静養室（スケジュール）→手洗い→静養室（お茶休憩）→アラーム→作業室
11:00-11:45	班別活動	【スケジュール4：DVD組み立て×2回】 作業室（作業15分）→静養室（休憩10分）→アラーム→トイレ→静養室（スケジュール）→作業室（作業15分）→静養室

## 【連絡事項】

- 活動の切り替えは静養室で行います。原則として活動ごとにスケジュールを確認します。
- 静養室での休憩の終わりはアラームで知らせます。
- ロッカーは静養室に移動しました。着替えは静養室で行ってください。
- ○○さんと動線が重ならないように注意してください（特に朝、休憩時間）
- 自立課題終了後、帰りの準備をするまでに20分間の休憩が入ります。

## 【問合せ事項】

# 「支援手順書」の例2 (文字)

( ● ● ● ) 支援手順書

時間	活動	サービス手順		メモ
		本人の行動	支援者	
16:00	おやつ	スタッフルームにて、おやつ、飲み物をもらう	カード提示により、本人におやつ、飲み物を渡す	
		中庭を3~5周歩く	時間によって、回数提示を変える(1周約5~6分)	
17:00	部屋で作業	三段BOXにある作業を上から行う	時間によって量を調節する	
17:30	夕食	食堂に移動	スムーズに移動できない場合はカード提示する	
18:00	歯磨き	歯磨きを行う	仕上げ磨きを行う	
18:30	入浴	入浴準備(タオル、シャンプー、	常同行動が見られる場合は、~	

## 【緊急時のとき】

### 【気をつけておいてほしいこと】

・常同行動により、一つ一つの活動に参加するまでの時間が多大になることが多くみられている。また、他の利用者にこだわり、それが原因でトラブルになることも多く、そうなったら、他の~利用者を一時的にその場から離れてもらうなど、距離を置いて20分ほど様子を見る。

# 「支援手順書」の例3 (写真)

Kさん 支援手順書

起床時対応 (当直明け)



当直明け  
職員が準備  
6-30



押し入れ中の作業題材をテーブル横



- ① 布団干し
- ② トイレ
- ③ 着替え
- ④ ひげそり
- ⑤ 掃除
- ⑥ 新聞 (時間がなければ無し)
- ⑦ ごはん
- ⑧ 歯みがき
- ⑨ 部屋で作業
- ⑩ 朝の会



声かけは  
シンプルに。

日課の説明

職員がカードを指さしながら、  
本人に読んでもらう  
(活動内容の説明は要りません)



本人が一番上のカ  
ードを取り、カ  
ード入れに入れる

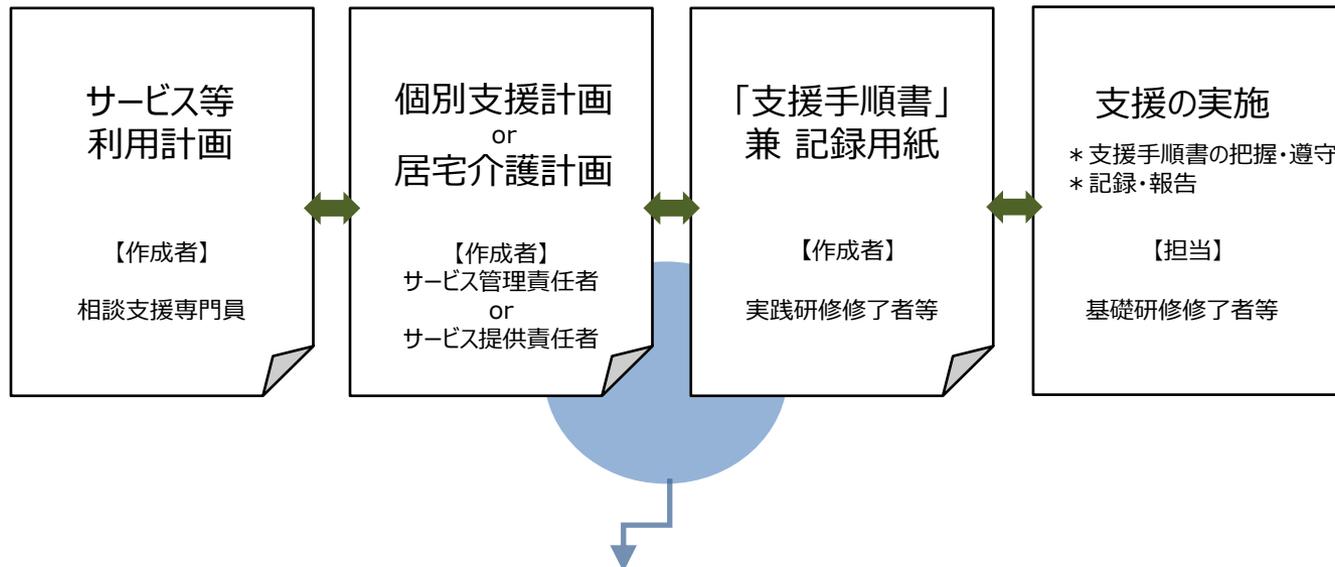
自分でやらせてもら  
うことが大切

※ 別途記録用紙あり

現場で支援を実施するときには、  
支援手順書に沿って支援することが大切

= 本人の特性に合わせた統一した支援

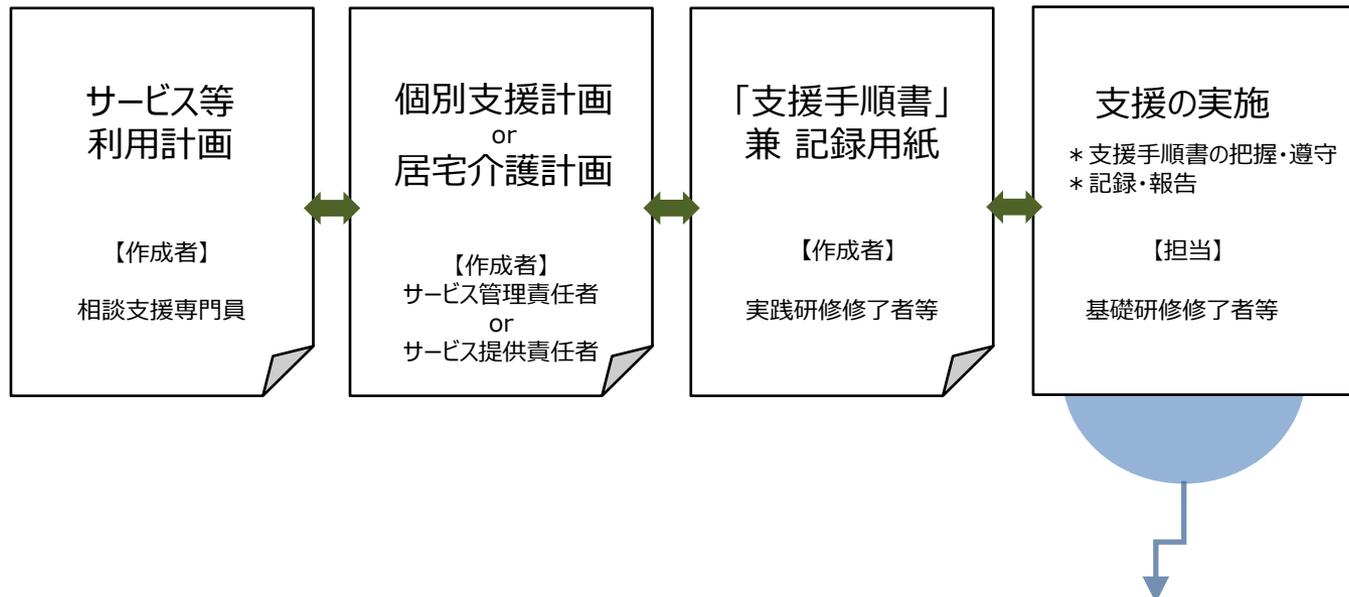
## 個別支援計画と支援手順書の関係



強度行動障害の支援においては、個別支援計画や居宅支援計画といった大まかな支援内容では、適切な支援を行うことが難しい。障害特性に配慮した留意点を整理し、日々の日課や各活動の詳細を決め、時間単位で各活動をどのような流れで行っていくかを詳細に記した「支援手順書」が必要となる。

# 支援の実施と記録

# 支援の実施と記録



実際の支援に入る時には、支援手順書に沿って支援をすること、支援時の本人の様子などを記録しておくことが大切。

# 支援手順書に従って記録する際の留意点

## 事前に確認しておくポイント

事前準備	支援ツールの準備など、事前の準備ができているか
支援手順書の内容	支援者が支援手順書の内容を理解できているか、内容に変更がないか
その日の状況	体調（睡眠、排便、てんかん発作などのリズムなど）やその日の状況（自宅でいつものこだわりができなかったなどで、落ち着かない様子など）にも影響を受けやすいので記録しておく

客観的な記録

# 記録の重要性

正しい状態像をつかむ

チームで情報を共有する

支援の効果を確認する

支援のベース

# 正しい状態像をつかむ

- 大変な人？大人しい人？・・・など印象では具体的な状態像がわからない
- いつ、どこで、どのような行動をとっているかなど、具体的な情報から正しい状態像を知る
- 正しい状態像を知ることによってその人にあった支援につながる

# 情報共有の重要性

- ・ チームで支援したり、対応を考えていく上で情報共有は重要
- ・ 直接の関わりで得られた情報をチームで共有する

# 情報共有のベースとなる記録

例

今日は大変  
だった

何が？ 誰が？  
状況がわかりにくい

田中さんの水遊びを止  
めたら、頬を叩く自傷  
があった。  
支援者も対応に困った。

具体的に記述

具体的な状況が  
共有できる

# 情報共有のベースとなる記録

- ・ 具体的な状況を記録する
- ・ 支援者の主観と具体的な状況をわけて記録する
- ・ 「いつ・どこで・誰が・どのように」を意識する
- ・ 読み手を意識する

→具体的な状況を共有することで、支援者の共通認識を持ちやすい

- 支援手順書に基づいて支援したが上手くいかなかったなので自分の時は対応を変えている

→バラバラの支援に

緊急時は除く

- うまくいかなかった時は上司に相談したりチームで共有する
- チームで共有し支援手順書を改定していく
- 日々の「報告・連絡・相談」が大切 

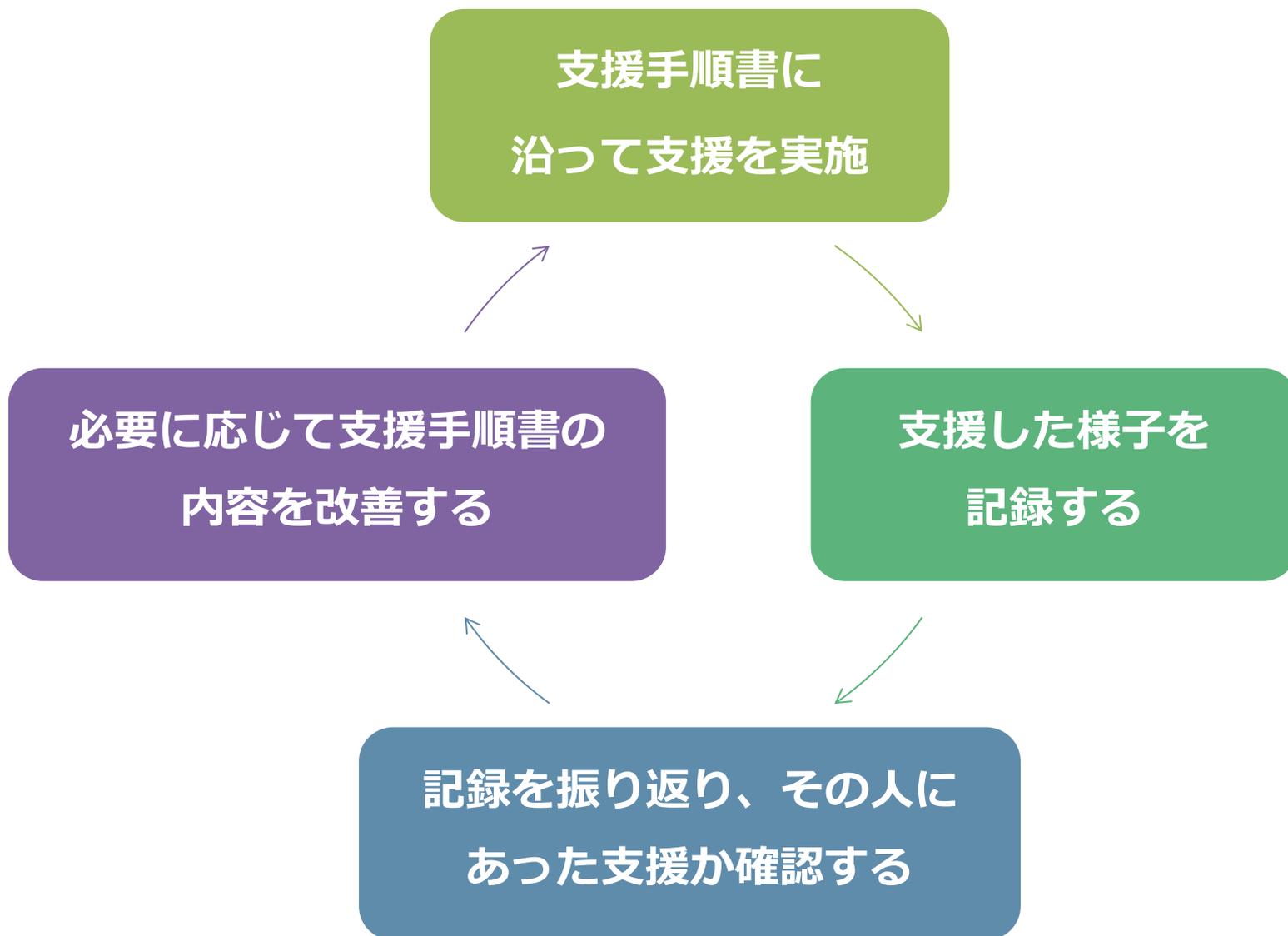
# 支援の効果を確認する

- 支援に取り組んだ結果が記録として残っていると振り返りしやすい
- 支援の結果を振り返りながら、その支援が適切かどうか？改善点があるか？を確認していく

# 計画の見直し

- 記録をもとに
  - 上手くいった支援は継続・発展させる
  - 上手くいかなかった支援は見直しする
- = 見直しを繰り返しより本人にあった支援手順書に

# 支援の実施



# ⑦ 支援を組み立てるための基本

- ・ 支援を組み立てるための基本的な流れ

- 支援においては次のような道筋を大切にします。

- I その人の特性や人生のニーズを把握する
- II その人の特性に配慮した支援を考える
- III その人の人生のニーズに沿った計画と実践、評価や改善のサイクル（PDCAサイクル）で、よりよい人生へと向かう

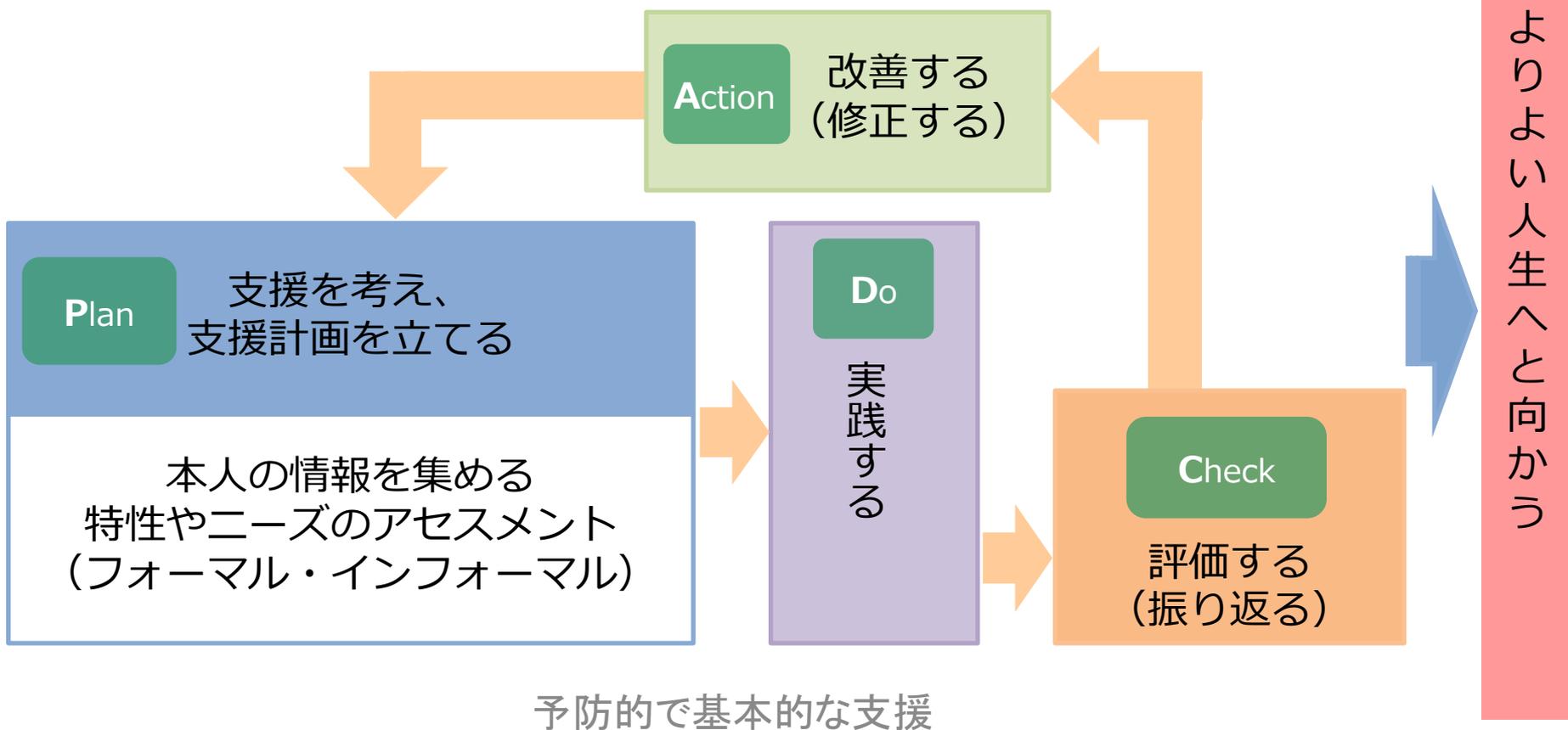
※PDCAサイクルとは、Plan（計画）・Do（実行）・Check（評価）・Action（改善）を繰り返すことによって、業務を継続的に改善していく手法のことです。支援を考える際もこのサイクルを重視します。

- IV 支援が停滞したり強度行動障害の様相が現れたりしたときには、改めて支援を見直し、支援の補整や補強をする

この講義では、Ⅲについて主にお話しします。

予防的で基本的な支援をベースに、  
プラスアルファの取り組みをするが、そこにもPDCAサイクルはある

### 強度行動障害の支援



# ⑧実践研修の進み方と 演習の構成

# 実践研修の進み方①

## ① アセスメントの方法

### 演習1

- ・ 具体的なアセスメントの方法  
(行動チェックシートの記入)

### 演習2

- ・ 障害特性に基づくアセスメント  
(冰山モデルの作成)

## ② 支援手順書の作成

### 演習3

- ・ アセスメントに基づく支援手順書の作成 (1)

### 演習4

- ・ アセスメントに基づく支援手順書の作成 (2)

## ③ 記録の分析と支援手順書の修正

### 演習5

- ・ 記録の方法
- ・ 記録の分析と支援手順書の修正

# 実践研修の進み方②

## ④組織的なアプローチ

講義 2

- ・組織的なアプローチの重要性



## ⑤実践報告

講義 3

- ・チームの支援の実際



## ⑥関係機関との連携

演習 6

- ・医療機関との連携方法

# 演習（１～５）の構成



- ・ 演習 1 から演習 5 まで順番に行うことが、支援手順書を作成するプロセスとなります。

## 【演習全体で学ぶこと】

- ① 支援者が統一した支援を実施するために必要な、障害特性に合わせた支援手順書の作成方法
- ② P D C A サイクルの流れで支援を改善していくために必要な、記録に基づく支援手順書の修正方法

# 実践研修修了者が目指すもの

## 【支援手順書の作成】

- ・強度行動障害の状態にあるケースに対し、基礎研修で学んだことを踏まえながら支援手順書を作成する。

## 【支援手順書の内容と記録方法を伝達する】

- ・支援の統一に向けて、「支援手順書」のサービス提供方法と日々の支援の記録方法について、現場スタッフに正確に伝達する。

## 【検証と修正】

- ・一定期間実施した支援の結果を取りまとめ、サービス管理責任者および現場スタッフと相談し、支援方法の変更や継続について議論する。